

No.3

東京文化資源会議

「ティーチャ」

T-Cha

東京文化資源会議
Tokyo Cultural Heritage Alliance

ニューズレター



Kashio Matsuda



Akiko Shiihara



Yukiko Katagiri



Mayuko Mitani

@Project School Yanaka

東京文化資源会議的 まちづくりのかたち 「プロジェクト スクール谷中」

東京文化資源会議の構想が整い始めた2015年。その構想を文化資源区内の「まちの単位」ごとに具体的な活動に落とし込む動きの中で、先頭を切ったのが「プロジェクトスクール谷中」です。

まちをつくる人材を育成する「プロジェクトスクール」の構想の具現化に着手したのは、30年来、谷中のまちづくりを「住民の活動」として推進しているNPOという歴史都市研究所の椎原晶子さん。

住民と行政という、単なる二項対立図式になりがちなことに閉塞感を感じていたとき、東京都や台東・千代田・文京の3区といった大枠の中で谷中を捉え直す可能性を、東京文化資源会議という組織に感じたとはいいます。

「それまで台東区と住民との間で話し合いを重ねて、進んだことや成果もありましたが、提案しても取り上



げられなかったこと、または先送りになったことも何度もありました。東京文化資源会議という背景を持つことで、まちの文化資源といった俯瞰したところから東京や谷中の良さや町の価値を捉え直すことができると考えました。専門家の調査に基づいて検討することにより、提案の信用度も増し、行政にも受け入れてもらいやすい面が生まれるのではないかと思います。

「スクール」という仕組みをつくった2つの理由

東京文化資源区の会議では、当初より各地区でプロジェクトスクールを立ち上げる構想がありました。「プロジェクトスクール」という形で谷中でも活動を起こしたのには、2つの理由がありました。一つは、東京文化資源区内において、まちづくりを実践する人材育成の仕組みづくりをしたかったから。もう一つは、

まちのことはまちの人が決める／土地のことは地権者が決めるという前提で、学び・考え・提示する提案型のまちづくりをしたかったから。
「突然よそから来た人や有識者ではなく、谷中というまちに関心をも



つ学生や社会人が『このまちにはこんな可能性がある』『課題はこうすれば解けるかも』



画やまちづくりに携わる三谷繭子さんはこう振り返ります。

「一番衝撃だったのは、世間を魅了する。谷中っぽい」というイメージは、住民の間では一概に歓迎されていないということでした。観光地区として発展する一方で、肝心の住民たちが住みにくさを感じ始めている現状を目の当たりにしました」
イメージの再生産が繰り返されることで、本来あるべき、住まうまちとしての谷中が失われつつもあります。プロジェクトス

「しれない」と自分の体験や学びの成果として提案をする。そうした利害関係のない提案が浸透しやすいかと思っています」

プログラムの企画メンバーの一人である首都大学東京 助教の片桐由希子さん。「共有と発信」を軸に組み立てられたプロジェクトスクールのプログラムは、「公開作戦会議」と呼ばれるインプットを目的とした講義と、非公開の「作戦会議」と呼ばれるチームごとの実践の2部構成。テーマを深掘りする「作戦会議」の

各チームには、学識や実務の立場から、地元の事情に詳しく住民との接点を持つ「世話人」をアサインし、机上と現場をより密に結びつける体制をとりました。一方的に教えるのではなく、学びのための材料を提供するファシリテーターのような役目です。

2015年度の参加者で、都市計

クルルの活動は、参加者にとって、住民が求める理想の谷中像を少しずつあぶり出し、自身の谷中のイメージを再構成していく過程でもありました。

三谷さんはプロジェクトスクールの後、当時から計画していたように谷中に自宅兼事務所を設け、事務所スペースを地域に開放してワークショップを開くなどの小さな実践をしています。

「利害関係のない提案」がまちづくりの難しさを突破する

2015年度のプロジェクトスクールでは、見直し候補となっている都市計画道路を中心に、景観や緑、社寺などからまちのしくみを考えるための調査・提案を行いました。スクール期間中に東京都が見直しの

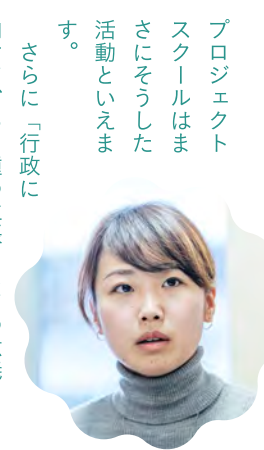


方針を決定したこともあり、学びの成果はスクール内だけではなく、谷中地区まちづくり協議会の環境部会などで発表され、まちの人の意見を通して2016年度に策定された『台東区谷中地区まちづくり方針』の一部に反映されました。
2017年度のプロジェクトスクールでは、「上野桜木アトリエ」「桜縁荘」といった、個別の場所の活用方法をめぐる提案を軸に行われました。2015年度の、谷中を都市計画的に「守る」ためのプログラムから、守りつつも「展開していく」こと、自分でまちを動かそうとする人材を育成することにも、より注力したとのこと。

谷中で生まれ育ち、商売を営み、まちづくり協議会の環境部会長でもある松田檀雄さんは「まちづくりの一番の難しさは、他人の土地や建物に対して口を出さなければならぬこと」と言います。

今ある谷中の生活文化を守るためには、規則やルールを定めるだけではなく、地権者の方々が前向きに受け入れやすいような選択肢を提案することが鍵となります。

一般市民自らが、行政用語を理解することはなかなか難しい。だからこそ、その間に入り、翻訳や互いの考えを再編集する立場が必要です。



プロジェクトスクールはまさにそうした活動といえます。

さらに「行政に向けて、ある種の主張としての意義もある」と松田さんは評価します。地域のベクトルと乖離することなく、まちの賛同を得ながら進める、まちづくりの本来の姿を再確認する機会に、プロジェクトスクールが寄与しているといえます。

今後は、これまでのプロジェクトスクールで築かれた新たなつながり、調査や提案を通して蓄積した知見をもとに、具体的なまちづくり制度を提案するチームを発足する予定です。実際にまちの絵（イメージ）を描き、住民や地権者に提案するまちづくりの制度やしぐみの具現化をリアルに感じてもらいながら、判断を住民に委ねる。プロジェクトスクールで試行した提案型まちづくりを実践していきます。



東京文化資源会議では、2020年を区切り、資源区内の各エリアで具体的な提案をし、その具現化に向けて動きだそうとしています。
「プロジェクトスクール谷中」でのノウハウが、東京文化資源区の各地で生かされることが期待されています。

（聞き手：江口晋太郎 記事構成：野口雅乃）

T-Cha NOW TOKYO PROJECT

東京文化資源会議では、民産官学の様々な分野の専門家や実践者が集い、東京の各地域で育まれている様々な文化資源をハード面・ソフト面から活用するプロジェクトを推進しています。ここでは、東京文化資源会議全体の動向や各プロジェクトの近況をお知らせします。



映像を通して伝える 本郷の「キオク」

「本郷のキオクの未来」プロジェクトでは、2月10日（土）に開催された「第3回文京映画祭」にて、特別上映枠として30分の作品を出展しました。本プロジェクトが立ち上がるきっかけとなった「菊水湯」を、3Dスキャンやドローンなどの最新技術にて銭湯建築を記録し

た映像のみならず、菊水湯の営業最終日のドキュメンタリー映像、さらには本郷で今なお残る旅館「鳳明館」、惜しまれながらも営業を終えた「朝陽館」のインタビュー映像等、盛りだくさんの映像作品を通して、本郷地域の様々な文化資源の「キオク」をご紹介しました。ハード・ソフト両面からの「キオク」の保存をこれからも続けるとともに、こうした映画祭のような機会でも今後ともお披露目したいと考えています。

上野の地域全体を 巻き込みながら、 文化資源の調査と 実験を繰り返す

東京文化資源区3km圏のセンターに位置する上野・湯島・御徒町。2016年度にスタートした上野スクエア構想では、同エリアを文化の一大拠点として再発信するための空間戦略を議論し、これまで検討や実践を重ねてきました。今年度は、上野の山と街を繋ぐ存在である不忍池に特に着目し、不忍池の公共空間としての活用の検討・提案を進めてきました。さらに、不忍池も含めた上野の南側エリアを掘り起こしていくことが、上野の街そのものの魅力を取り戻すことにつながり、かつ東京文化資源会議で進めている周辺の様々なプロジェクトと連携できる可能性も高



精神文化を象徴する 社寺会堂の 21世紀的 あり方を模索

古代から近代までの日本の精神文化を象徴するニコレイ堂、湯島聖堂、神田明神、湯島天満宮を核とする湯島・神田地域の21世紀的更新について、その文化資源を今後の日本社会のあり方を考えることを基礎に、グロ

うことが共有できました。2月9日に開催された第4回委員会では、地元商店主の方との熱く積極的な意見交換もあり、地元の声も受けとめながら今年度のまとめ作業を進めました。次年度以降もエリアビジョンを構想していく一方、具体的に見定まってきた南側のエリア内で地域資源調査と実験的空間活用を展開していく予定です。

『帝都物語』の 地図制作から 新たな文化資源を 見出す

地図ファブPPTでは、明治40年から約100年間の帝都東京を舞台とした、荒俣宏氏の『帝都物語』にまつわる地図カタログの製作を進めています。同時に、製作の過程で連続トークセッションと完成披露シンポジウムを企画しています。トークセッションの第1回目は2018年6月11日（月）に神田明神地下ホールにて、「帝都物語からみる江戸東京の風水」というテーマで、原作者である荒俣宏氏と清水祥彦神田明神権宮司に対談していただく予定です。他方、これまでにアーカイブ

ーバルかつクロノジカルな位置付けと意義を踏まえた可能性を多面的に検討しています。現在は、グローバル時代のロイヤリティの価値について理解を深めるために、ビジネス、地域計画、建築を専門とする3人の識者を交えた勉強会を行っています。ソフト面ではこの地域の学術・宗教施設を横断した自由な議論の場を設ける「湯島神社社寺会堂塾」（仮称）を構想する他、ハード面ではパブリックスペースのあり方に関する研究と模型制作を進めています。

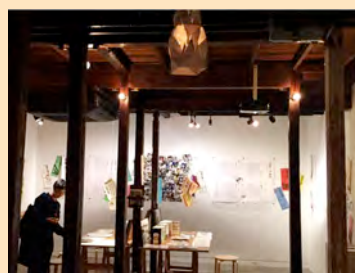
雑誌『谷中・ 根津・千駄木』の アーカイブから 見えてくるもの

地域活動を継続・発展させていくためにデジタルアーカイブの手法がどのように活用できるのかを考える、地域文化資源デジタルアーカイブ・プロジェクト。地域の文化資源をデジタル技術と接続する同プロジェクトの第1期では、地域雑誌『谷中・根津・千駄木』の第10号までを対象として、雑誌の記事とその

してきた多くの地図を、皆様に公開できるようシステムの最終調整を行っています。バラバラに配布されていた地図が、キーワードや位置からの検索で手に入れることができるようになります。こちらも、完成しましたらいち早く皆様にお知らせいたします。



原資料のデジタルアーカイブ化を行ってきました。作成したデジタル資源を発信し、その活用方法を検討しています。11月24日にはデジタルアーカイブのこれまでの活動の中間発表のためのイベントも開催しました。この活動を出発点として、2018年からは第2期プロジェクトを開始しました。第2期では、地域の文化資源を蓄積しネットワーク化するために、デジタル化やコンテンツ活用のための仕掛けを街の中に配置することを狙いとしています。さらには、デジタルアーカイブを新たな公共性のための社会基盤として発展させる方法を模索します。



歴史的建造物や
地区の保全のための
制度研究と提言に
向けた活動

2017年6月、「リノベーションまちづくり制度研究会」が発足しました。地価が高く、経済活動が活発な東京都心部では、歴史的建造物や文化的な地区を個々の地権者の努力だけで保全し続けるのは難しい状況です。相続税や固定資産税の負担や改修時の法的不適合等が歴史的建造物存続のネックとなっています。税制や金融制度による支援、歴史的建造物や地区の保全を支援する建築・都市計画制度の活用、創出などが喫緊に求められています。

当研究会では、①地元金融機関と連携したまちづくりファンド活用による具体的プロジェクトの実現、②歴史的資源保存を地域貢献事業と捉えて、容積移転制度や特区制度、建築基準法・税制緩和等に関わる政策提言とその実現、を目標に検討をはじめました。

賛助会員のうち、不動産や金融、建築・都市計画制度に詳しい方を迎え、先進事例や法制度

の提案、運用情報を検討し、東京の文化資源を活かすための法制度・事業の提案、実現を目指し、これまでに議論を進めてまいりました。

①の目標に関連して、2018年4月には、朝日信用金庫と民間都市開発支援機構の共同出資による「谷根千まちづくりファンド」が開設計画です。

スローモビリティから、
東京の住まいと
暮らしのこれからを
議論する

Tokyo Tram Town 構想は、文化資源区域内を走る「スローな交通手段とシステム」の導入を検討するプロジェクトです。その目的は単なる交通手段の検討ではなく、スローモビリティを導入することによって「文化資源をつなぎ合わせ、どのような新しい文化体験や経済活動を生みだせるか」「この地域にどのような新しい都心居住のあり方を実現できるか」といった、都市生活文化の視点から議論・検

証することを目的としています。これまでに産官民学、多様なバックグラウンドを持つ参加者をお招きし、柱となるコンセプトを生みだすためのワークショップや、その可能性について議論するラウンドテーブルを実施してまいりました。

現在は、この文化資源区の特性によりフォーカスしたリサーチを進めており、グランドビジョンの策定や、具体的なプランに落とし込むために、今後は地域に関わる方々にご参加いただけるフィールドワークやワークショップを開催し、議論の輪を広げていきたいと考えています。



編集後記

特集の編集を経て、老若男女が同じ志を抱くことって素敵だなあと改めて実感しました。この号がお手元に届く頃には桜も咲いていますね。ぼかぼか陽気ですっかり暁を覚えない私ですが、眠い目こすりながら新年度も頑張ります。(雅)

先日開催された広報委員会では、今後T-Chaで取り上げる特集を検討しました。取り上げたプロジェクトが複数あがってきて、第3号以降の特集枠も予約いっぱいという状況です。東京文化資源会議の活動がいよいよ実体化してきたようです。(陸)

田舎もんとは、田舎に住んでいる人のことではなく、自分たちのルールに閉じこもって交流しようとしていない人、のことなのだと、田舎への出張を繰り返して気が付きました。東京にも田舎もんはいらるし、田舎にも田舎もんじゃない人もいる。はて、田舎もんの反対語ってなんだ。(なが)

年度の節目は出会いや別れの季節です。同時に、新たなチャレンジや次なる活動の種が芽吹く季節でもあります。東京のまちなかで生まれた様々な活動の種が、今年はどうな成長を果たしていくのか。楽しみで仕方ありません。(江)

[ティーチャ]東京文化資源会議ニューズレター No.3

読み、旨み、味わいのある東京の文化資源的エキスを3ヶ月に一度、お届けします。

編集：東京文化資源会議広報委員会 デザイン：渋井史生(PANKEY inc.) 執筆：野口雅乃、江口晋太郎(TOKYObeta Ltd.)

写真：加藤甫 印刷・製本：スターツ出版株式会社 発行人：東京文化資源会議 発行日：2017年3月31日

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町2-1 TEL：03-5244-5450 FAX：03-5244-5452 MAIL：info@tohun.jp URL：http://tohun.jp

